



米國排日の暴狀

一一六



太平洋の波濤を越えて来た「國難」  
米國排日の暴狀

木村毅

桑港の學童排斥

「母さん。」  
「おや、お前、もう歸つて来たのかい。何か忘れものでもしたの。——おや、泣いてるのかい。どうしたのさ。」  
「學校へ行つたらね、先生が、僕等にはもう教場へ入つちやいけないつて、締め出しやつたんだよ。」  
「どうしてさ、お前、又、おいたをして叱られたんだらう。」

「いゝえ、さうぢやないの、僕達、みんななんだよ。日本人は、もう白人の學校へ来ちやいけない。今日から支那人の學校へ行つていふの。」  
「へえ、そりや又どうしてだい。」  
明治三十九年の十月、桑港、金門公園には楓の葉がこぼれ初めた黄金季節であった。  
附近一帯、およそ日本人で就學兒童のある家庭では、どこでもこんな問答が母と子供との間に交された。

今回、紹介するのは、祖父が残した書籍の中から、当時の雑誌の付録の中にあつた小冊子の一つのコラムです。

新潮社の月刊誌『日の出』は「國民大衆雑誌」と銘打たれていただけあつて、どこの家庭にでも普通にあつた雑誌です、錢湯や床屋で回し読みするような大衆誌でした。その中に、今は教科書にも載っていないような問題が十大国難として紹介されていることに不思議さを感じ、一度読みやすく現代仮名遣いに直して、誰かに読んでもらおうとリライト作業をすすめてきました。

今回、志雲会の仲間を紹介したところ、反響をいただいたので、皆様にも紹介させていただきます。大正生まれもほぼ居なくなり、戦前の大衆の感覚をつかむ事が難しくなっている今日、こういった戦前の物語風の読み物を読んでみる事も、皆様の感情に何か訴えかけるものがあるはずです。では、昭和八年にタイムスリップして物語を楽しんでみてください！

昭和八年(1933年)新潮社月刊誌「日の出」七月号付録  
國難突破十大物語より

太平洋の波濤を越えて来た「国難」

## 米国排日の暴状

木村毅(きむら き)※1

### サンフランシスコの学童排斥

「ママー！」

「おや、お前、もう帰って来たのかい。何か忘れものでもしたの。——おや、泣いているのかい。どうしたのさ。」

「学校へ行ったらね、先生が、僕らにはもう教室へ入っちゃいけないって、締め出しちゃったんだよ。」

「どうしてさ。お前、また、おいたをして叱られたんだろ  
う。」

「いいえ、そうじゃないの、僕たち、みんななんだよ。日  
本人は、もう白人の学校へ来ちゃいけない。今日から支

那人の学校へ行けって言うの。」

「へえ、そりゃ又どうしてだい。」

明治三十九年(1906年)の十月、サンフランシスコ  
金門公園にはメープルの葉がこぼれはじめた黄金季節  
(ゴールドデンシーズン)であった。

付近一帯、およそ日本人で就学児童のある家庭では、  
どこでもこんな問答が母と子供との間に交わされた。

これこそ、その後今日まで解けない日米問題の口火と  
なった、いわゆる、サンフランシスコの日本人学童排斥  
問題である。

それまで、日本の学童は白人と同じく一般の公立学校  
への入学が許されていたが、市の学務当局は不意打ちに  
それを断って、支那人学童のために特別に設けてある隔  
離学校に、日本児童を押しこもうとしたのだ。

これは、何故であろう。日本学童の成績や素行でも特  
別に悪いためであろうか。いやいや決してそうではない。

その証拠には当時のオークランド(明治初年高橋是清  
蔵相が少年奴隷として売られていたサンフランシスコの

隣接町、早くから日本移民の入った所である)の第三公立  
学校長マッカーディ氏はこう言っている。

「日本人学童は男女共に概して頭脳が優秀で、各級の首席  
次席は大抵その占める所となっている。その意味では  
日本学童を敬愛こそすれ、排斥する理由は一つもない。」  
と。

それなら、あのスポーツの盛んな米国で、日本人はその  
方面の注意が不足で、したがって性質が因循で、引つ  
込み思案で、闊達な米国人に嫌われたのであろうか。

いや、そうでもない。

成程、当時の日本人にスポーツは短所であった。しか  
し必ずしもそうばかりは言えない。ある小学校で十一  
二歳までの学童が少年組と少女組に分かれて野球の試合  
をした。ところが意外にも少女組の方が勝利を占めた。  
そして更に意外だったのは、その組の肝腎な投手も捕手  
も日本人少女であったことだ。

これは安部磯雄氏が当時の米字新聞にこの記事を発見  
して、愉快さのあまり、世に紹介せられたのを私は今も

記憶している。

### 青年日本人の心意気

そんなわけで学童の排斥を受けるような謂れが一つも  
ない所から、日本側では「甚だけしからんではないか！」  
と抗議を申しこんだ。ところが、米国人の目的が意外な  
方面に伏せられていることが分かったのである。

彼らの排斥したいのは子なる学童ではなくて、親なる  
日本人労働者であったのだ。しかし最初から露骨にぶつ  
かっていくと問題が大きくなるので、卑怯にも一番抵抗  
力の弱い児童の上に圧迫を加えたのだ。

それなら日本人労働者は、なぜ米国で嫌われるにいた  
ったのか。

それはその前年、すなわち明治三十八年に、日本が露  
国を満洲の野に撃破して、あまりにも輝かしい勝利を得  
たことを、心憎く思ったのが一番直接の原因である。

米国では、日本を新文明に浴させた恩人は自国だと自  
負していたから、先輩が後輩を導く態度をもって、こと

ごとく日本に好意ある指導者の役割を演じた。日清戦争のときだってそうだし、ことに日露戦争のときに、大統領セオドア・ルーズベルトの寄せた好意はよくこれを証明している。

従って日本移民には便宜と好意を与えて、支那その他の東洋移民とは区別していた。それまでも支那人労働者排斥はしばしばあったが、それは日本人には及ばなかった。(もつともこの友邦の労働者が迫害されていたのを拱手傍観して、自分のみは高等民族だというような顔をして、調停にも当たらなかつた当時の日本の外交態度は甚だ感服できないが。)

しかし、由来米国では、移民を沢山送る国家に対して、あるいは悪口を放ち、あるいはこれを排斥する癖は前からの事であった。アイルランド・ポーランド・イタリー、支那はもとよりのこと―などが、ケチだとか、悪党だとかいう汚名を世界的に負っているのは、大抵、米国で製造された悪口に基づく。

日本にも、とうとうそのお鉢が回ってきたのだ。最後

のお鉢であっただけに、今まで、各被排斥国の着ていた汚名が、総合的に日本労働者の上に注がれたまでの事だ。日本政府はあわててその取りなし努めると、米国政府は言った。

「よろしい。児童は従来の通り白人の公立学校へ復学させよう。その代わり、日本からの移民は今後禁止して貰いたい。」

こうして日本に一時的に帰国している移民の再渡航者、移民の父母妻子、従来、米国で農業に関係していた者以外には、旅券は下付されない事になった。これがいわゆる紳士契約である。

アメリカといえどもそれまで、青雲の氣を負う日本の若人達にとって、最上の夢想郷であったのだ。サンフランシスコの金門湾!と聞いただけで青年達の胸の血は踊つたものだ。

カリフォルニアの秋の風、  
丘にや黄金(こがね)の花が咲く。

この「ヤング・ジャパン」の心意気をうたった歌は、太

平洋の行き帰りの船の甲板に潮風を伝って元気よく響いていたものだが、紳士契約の締結と共にその歌声は途絶えてしまった。

「米国討つべし。ヤンキー膺懲すべし。」

こうした叫びは、その頃から聞こえないではなかった。しかし、日露戦争に死力を出し切った当時の日本には、もとよりその弾力はなかった。

日本は門前の狼を防いで、後門を虎に襲われたのだ。満洲に強国ロシアは折伏したが、思わざる新たな国難が、太平洋の波濤に乗って、打ち寄せた。

## ハースト系諸新聞の毒舌※<sup>2</sup>

米国の排日問題は細かく分析してみると、資本家からの排日と、労働者側からの排日と、非常に錯綜している。「日本人は低い賃金で、時間の制限なく働く。これは白人労働者の生活を脅かすものだ。」

という労働者側からの排日は、もっともな事なので、充分、考慮して見なければならぬ点であった。サンフ

ランシスコの市議会に労働同盟が支配権を初めてにぎった。そして排日の狼煙が上がったことを忘れてはならない。

しかしその点だけだったら、話をつければ充分わかる事だし、明日からでも改める事ができる問題である。

資本家の排斥理由はもっと悪辣だった。その黒幕で糸を操っているのは、世界一の新聞組織網を有するハーストなんだから堪らない。

彼は公然と言っている。

「米西戦争を起こしたのは俺だ！」と。

また、彼はメキシコに広大な土地を所有している。もしメキシコが米国領になればその地価は何倍かに騰貴するであろう。そこで彼は、米墨間に戦争を起こさせようとして、しばしば毒々しい虚報を、大きな活字で新聞紙面に喚き立てさせる。

正直な日本人労働者も、結局は彼の毒牙に掛かったのだ。

ハーストはソノラ※<sup>3</sup>に広大な土地を持っている。

「どうか、あそこへ来て農業をやってみては貰えまいか。」

ハーストはこう日本人農民に頼んできたのだ。しかしどうしてだか、日本側では、それを拒絶した。

「よし、そんなら今に待て。目にももの見せてくれるから。」  
そうして、その翌日の新聞紙面から、ハーストは排日のラッパを吹き立てた。

同じ新聞でもたとえばロサンゼルス・タイムズは、その社主の持つカリフォルニア南部の土地が日本人農民を雇って、見事な成績を挙げている。だから決して日本排斥に加担しない。

が、何をいうにもハーストの新聞界における勢力はオールマイティである。米国各都市には必ず彼の新聞がある。それが筆を揃えての排日突撃だから、米国大衆はもとより政治家の気持ちまでそれに煽られてしまったのだ。

米国では、現在、日本移民に土地所有を許さない。但しこれは日本の枢密院あたりで(日本での)外国人土地所有法の制定を嫌ったところから、米国には再三、日本移民に帰化権も土地所有権も与えるよう提議したのに、日本

国内では、ひたすらそれに触れる事を避けていたのだから、今日の状態になったからとて必ずしも米国のみを責めるわけには行かぬ。

そして米国の資本家は、日本移民の土地所有権は剥奪しても、借地権だけは認める。これは日本人農民の手にかけなければ土地が荒廃して、地価が下落してしまうからだ。

彼等といえども日本移民が農業的な天才である事だけは認めざるを得ない。カリフォルニアが米国第一の農業地になったのは、そこが日本に近いからだ。それを開拓して今日に至らしめたのは、主として日本人と支那人の力だ。

## 死屍の山

日本人の農業的天才と、そして不屈の心意気とが、一つの奇跡を地上に出現させたのは、帝原地方(インペリアル・ヴァレイを日本人はそう名付けている)のメロン園で

ある。それはメキシコに近い国境に、何百マイルと続く砂漠である。私があゝの地方を旅行したのは一昨年のおちようど今頃だったが、毎日摂氏60度になる酷暑。自分の経験した範囲ではインドよりアフリカのサハラ砂漠よりまだ暑く、まるで炎の中にいるのと同じであった。

そこを自動車で横断したのだが、行けども行けども広漠たる砂原か、でなければ磊々(ライライ)たる岩石で、目に一青を見ない。

が、島南端、ブローレイからエルセントロの町近くに入ると、初めて日本人労働者の姿を所々に見かけるようになり、やがて豊穡な畑地が眼前に展開してくる。その時には、初めて私たちも甦ったような気がした。ここは今や世界第一のうまいメロンの産地で、あのキャンタロープもハネ・デュウも、一番いいのはここで収穫されるのだ。

しかもこの農園をこれまでに仕上げたのは、みんな日本人の手一つによってであった。

その代わりに払った犠牲も莫大なものであった。なに

しろ砂漠の中で、いや、炎の中で働くのだ。最も熱望されるのは水でなければならぬ。飲むにしても、浴びるにしても。

しかし清水などは勿論ある所ではない。あるといえれば熱砂の中を流れる溝に溜まった、どろりとした飴湯のような泥水だけだ。

日本移民たちは汗みづくになった体でそれに飛び込むのだから、すぐ激しい熱病にかかって将棋倒しに息を引き取った。

しかも、それを目の前に見て、充分警戒せねばならぬことは分かっておりながら、それでも飛び込まずにはいられない水の誘惑であったのだ。

だからそこでは日本人労働者は死んで、死んで、これで日本人種は絶滅してしまうのかと思うほど沢山死んだのだ。それは北米日本移民の旅順口であった。

親の、兄弟の、また友の屍を乗り越えて、それでも屈せず、彼らはこつこつと鍬をふるった。

インペリアル・ヴァレイの土は日本移民の汗で、膏で、

血で、また骨で、肥やされている。だからこそ世界一のうまいメロンがなるのだ。

偉大なる労働の力ではないか。また偉大なる日本人労働者の不撓の執着力ではないか。これに頭の下がらぬものは人間ではない。

だが、ここに米国の資本家という存在がある。かれらはメロン畑に利益が多く、そして日本移民が、メロンの栽培に水を必要とすることを見て取ると、巨額の資本を投じて水道を作った。

この水道によらなければ、一滴の水といえども自由に使用できないようにした。そして大資本力の奸計で、せつかく日本移民が屍の山を積んで開拓したメロン園を、彼らはどうとう剥ぎ取ってしまった。

だが、たとえ取られたらつて「はい、はい」と言つてその地が去られようか。せめても、はかない借地権に縋りついて、苛酷な排日法案と戦いつつ、執拗にそこで頑張っているのは、あの地の砂に犠牲となった親兄弟の執念がこもっているからだ。

議会を通過した一片の法案なんぞで、片付くと思つていたら大間違いだ。

私はインペリアル・ヴァレイに旅行した時、あの地にいる日本人諸君から、

「木村さん、まず墓場へ行つて下さい。」  
と言われた。

浅はかな私はうっかり、きつとこの地の人たちが誇りとしているような、立派な墓地でもあるのだろうかと思つていた。

そうではなかったのだ。それは僅かに姓名と年齢とだけを記した小さな石塊と木片とが、立て並べられているだけであつた。ただ驚いたのはその数だつた。それは無数に、無数に、そして又無数に並んでいた。年齢を見るとたいてい二十代の青年で、三十以上というのは私の探した限りでは見当たらなかつた。

私が、思わずも身世蹉跎(衝撃で体が動かない)の感に愴然としてその墓地を低徊して去りかねていると、メキシコ国境の山の端に新月が出た。酷暑のため銅の色の光

を放っている。

もろともに見ばやと思ふ人はみな

草の下なり秋の世の月

これは戦場を吊った歌だが、帝原（インペリアル・ヴァレイ）は即ち日本移民の古戦場だ。

## 日本への脅威

サンフランシスコで学童排斥があつてから二年の後、すなわち明治四十一年には、米国の大艦隊が世界周航壮途に上るにあたって、わが横浜へも寄港することになった。

だがこれが通り一遍の世界周航であつたであらうか。それにしては大戦闘艦一六隻を中心とする大艦隊は、あまりに大袈裟すぎるではないか。

この壮途を企てたルーズベルトの腹を読むには、もう一度、日露戦争の時まで遡らなくては、話が分からない。ルーズベルトは、日本が満蒙の地からロシアを追放するのには勿論大賛成だった。だから後援を惜しまなかつ

た。

しかし日本がロシアの後釜に座って、満蒙の利益を壟断するということになる、主人が代わっただけで、悪いことは同じではないかと、いささか首を傾げた。

英、独、仏、露が早くから支那を分割したのに立ち遅れた米国は、ジョン・ヘイが國務卿（大臣）だった時代に「門戸開放」「機会均等」ということを国是として唱え、それ以来、それが政府の方針としてせられているのに、日本を満蒙でなすがままに任せておけるものではない。

そこへ丁度幸いな事に、米国鉄道王でもある、クーン・ローブ※<sup>4</sup>という金融資本が、ハリマンという男を使者として、日本と交渉させる事になった。

ローブ会社のもくろみでは、自分の所有する米国横断鉄道・太平洋汽船会社を、今度、日本がロシアから権利を得た南満州鉄道と連絡し、さらにシベリア鉄道につなぎ、バルチック海峡に出て、そして最後に大西洋を経由して、米国に還る世界一周の循環運輸路を開く大計画なのだ。

「それには日本政府とまず交渉せねばならぬから、ご足

労でも、君、ひとつ使者を頼む。」

こういわれて、ハリマンは密命を帯びて日本へ渡つて来たのであった。

彼は桂首相に会つて提議した。

「私の方でシンジケートをつくります。そして南満州鉄道も、その付属物も、経営にお互いが半分ずつ権利をもつて、鉱業もまた共同経営にしましょう。そしてこの会社は、もちろん、日本の法律に従い、戦争のある場所には日本が使用の優先権を持つ。――早い話が、日本の技術と熟練で、アメリカの資本を運用して、支那の市場を開拓するのです。」

このローブ会社は、米国で外債募集をした時の請元だったので、こちらからいえば恩義があった。それに戦後の財政が極度に疲弊している時だったから、米国から巨額の資本が出るというので桂首相の意は大いに動いた。

伊藤、山縣、松方、井上の諸元老も賛成だった。

そして、この契約はとうとうまとまった。ハリマンはこの成功に意気揚々として帰米の船に乗った。(桂―ハリマン協定を参照の事)

ハリマンが乗船したのと入れ違いに、三日経つと、同じ横浜に、日露講和の重大使命を終えた小村寿太郎全権大使が降り着いた。

彼は船中、極度の疲労と病気で、死を覚悟し、又たとえ無事に日本へ帰り着いたとしても、そこで暴徒の憤激のために殺されるものと覚悟して、悲壮な遺言を随員にしていた程だ。しかし、どうにかこうにか無事に東京へ帰り着いた小村は、ハリマンとの契約を聞いて非常にびつくりした。

「いや、それは困る。満鉄こそ今度の収穫の一番大きい、一番大切なものなのだ。その権利にちよつとでも外国人を参与させてたまるもんか。そんなもの、即刻破棄することだ。」

こうして、一通の無線電信は太平洋の空を走った。ハリマンがサンフランシスコに着いてみると、そこには、せっかく彼がまとめた契約を破棄するとの報が待っていたのだった。

何でもないようだが、このハリマンの暗中飛躍は、日

本の帝国主義的発展のためには一つの重大危機だった。それだけにこれを壊した小村外相の措置は、全明治、いや恐らくは日本の全外交史を通じての、最も輝ける成功の一つであった。

その代わり、米国の資本家、事業家、金融業者の失望は一通りではなかった。彼らは満州という無二の立派な市場への足掛かりを失ったのだった。

ルーズベルトも、これにはひどく幻滅を感じた。しかし彼はカイゼル(ウイヘルム二世)をも一目おかせていた剛愎(頑固)で人に従わない(こと)の鉄腸漢(鉄の様に硬い意思を持つ男)だ。普通の人間なら、日露講和談判の骨折りにもかわらず、日本からは前記のごとく充分に恩を報いられず、自国の国民からはあまりに日本の肩を持ちすぎたといつて評判が悪いことで、気を腐らすはずであったが、ルーズベルトはそんなに女々しくなかった。

「よし、日本を思い知らせるには、外交文書の応酬など、まどろっこしい手段ではダメだ。実力に限る。それは海軍の充実だ。」

そう思って、彼は二年間、熱心に艦船増強に意を注いだ。そして今や、ほぼその意が満たされるまでに至った。

戦艦十六隻を中心とする大艦隊は、こうして海波を蹴って世界周航の途にのぼったのだ。

勿論、当時から識者の間には、ルーズベルトがどんな意図でこの壮図を思い立ったのか分かっていないではなかった。しかし、先にも言った通り、戦後の疲弊で、彼の恫喝を弾き返すだけの弾力が、当時の日本には無かったのだ。とすれば、涙を包んでうわべには歓迎の意を表するより他に方法が無かった。

今から思えば全く正気の沙汰とは思えない。

何も知らない群衆は、横浜全市を、昼間は日米国旗で、夜は彩灯で埋めた。それは全くのお祭り騒ぎだった。

後でルーズベルトから、明治天皇に、奉った謝辞を見ると、こんな一説がある。

「艦隊の将士、随所に歓迎を受けたるも、未だひとつも日本国に於ける熱誠の款待に優るものを見ずと報告せり」

## 重大なる結果

その後、日米問題はますます悪化するばかりで、好転の兆しはちっとも見えなかった。

世界大戦(※5)の際、日本移民はよく米国民民としての義務をつくして、米国の義勇兵募集に応じて欧州戦線に立った者も多数あるので、多少、排日感が緩和されたが、それもその時限りで、シベリア出兵、講和会議での山東問題(※6)と時を経ればまた、ますます紛糾が激しくなるばかりであった。

そして一九二三年十二月

カリフォルニア選出下院議員アルバート・ジョンソン(共和党所属移民委員長)は帰化不能外国人(すなわち日本人などで、日本を直接目的とする)の入国禁止条項を含む移民法案を下院に提出した。

これと相応ずるように上院でもカリフォルニア選出のジョンソン(共和党所属)が帰化不能外国人の子の国籍に関する憲法修正案を提出した。

私は今、この内容を説く必要を認めない。要するに日本移民のため絶対に門戸を閉鎖し、既に米国にある者の妻子も呼べないような、ほとんど羽翼をことごとく、もぐという過酷な待遇案を出したのだ。

わが埴原大使※7は直ぐに(米国)国務卿と接渉した。すると、国務卿はこう答えた。

「なるほど、今度の提案はあまりに日本に過酷すぎるので、政府も非常に憂慮しています。ついてはどうでしょう、日本の方でひとつ強硬な抗議書を送って貰えますまいか。そうすれば、分らずやの排日議員連中も少しはへこむでしょうから。」

「よろしい。強硬に出た方がいいなら、いくらでも強硬にやりますよ。」

そして一九二四年三月二十四日付けをもって、長文の抗議書が埴原大使から、国務卿へ提出された。未だ世には公にせられないが、これは米国政府の同意のもとに提出したのであることは、よく銘記しておいて貰いたい。

その最後にあったのが次の一句だ。

「もしも、この特殊条項を含む法案にして成立を見んか、両国間の幸福にして、相互に有利なる関係に対し、重大なる結果(grave consequences)を誘致すべきは、本使の感知せざるを得ざるところにして、貴官もまた同感なるを信ずるものなり。」

だが、この抗議書は、頑固な排日議員を圧迫しようとして、却って正反対の結果を招くことになってしまった。

「重大な結果(grave consequences)とは戦争ではないか。」

「何を、日本は、小国のくせに、生意気な」

「日本討つべし。法案通過させるべし。」

こうしてとうとう、この法案は議会を通過してしまつたのだつた。

この時日本の外交がもう少し強腰であつたらよかつただろうと言われるが、それは今から言っても詮無いことだ。

失意の埴原大使は更迭を命じられて悄然として帰国の船に乗った。そこに、一人の壮漢があらわれて、

「この腰抜け！国賊めが！」と、面罵した。

その時「大使は、陛下の御信任状を持っている、陛下の御代理だ、言葉を慎むがよい」と同船の乗客がたしなめたそうだ。

が、その国賊と罵った言葉は、必ずしも埴原大使へ向けたものだけではあるまい。米国に対する胸中の鬱塊(鬱屈の塊)を洩らしようもなく、たまたま、その漢も大使の顔を見て、一気に爆発したものではなからうか。

これは当時(9年前)の国民の何人も持っていた、そして洩らすところがなかった胸中の鬱塊(鬱屈の塊)ではなかつたのか。

こうして、太平洋の波濤に乗って、「国難」は幾たびかやって来た。それを国民はじつと堪えた。否、今もお、じつと堪えている。

次項に作者紹介など注釈あり。

※1 木村毅（きむらぎ、）

勝南郡勝間田村（現勝央町）出身の小説家・評論家。1894（明治27）2月12日～1979（昭和54）年9月8日。地元の高等小学校を卒業後、大阪のキリスト教会で英語を学び、1911（明治44）年早稲田大学予科文学部英文科に入学。卒業後は出版社に勤務しながら文筆活動を続け、小説に関する理論的研究を『小説の創作と鑑賞』（新詩壇社 1924年）に集成し、ついで『小説研究十六講』（新潮社 1925年）を書き好評を得る。吉野作造らを中心に結成された明治文化研究会に参加し、『明治文化研究』、『幕末明治新聞全集』などを刊行。1931（昭和6）年渡米した後『ラヴーザお玉』（千倉書房）を発表し、大衆文学に新しい領域を築いた。明治文化研究の功績で菊池寛賞を受ける。小説家阿部知二は従兄弟にあたる。勝央町役場に文学碑がある。

以下、注釈はウィキペディアより引用

※2 ウィリアム・ランドルフ・ハースト（英語：William Randolph Hearst, 1863年4月29日 - 1951年8月14日）は、サンフランシスコ生まれのアメリカの新聞発行人。新聞王と呼ばれた。アメリカのメディア・コングロマリット、ハースト・コーポレーションの創業者。映画『市民ケーン』のモデルとしても有名。

※3 ソノラ州 メキシコ北西部に位置する州。東はチワワ州に接し、南はシナロア州、北西はバハ・カリフォルニア州に接する。北はアメリカ合衆国のアリゾナ州に接し、西はカリフォルニア湾（コルテス海）に面する。

※4 1860年代アブラハム・クーンとソロモン・ローブの姓を組み合わせてクーン・ローブ商会とした。その後、事業で手を組むと同時にクーン家の娘イダとローブ家のモリスが結婚して一族となっている。その娘であるテレサと結婚したのが、ジェイコブ・ヘンリー・シフである。ジェイコブ・ヘンリー・シフはドイツ・フランクフルトのゲッター（フランクフルト・ゲッター）でロスチャイルド家と共に住んでいた。

1870年代以降、クーン＝ローブ商会は、今日でいうベンチャーキャピタルとして、当時の鉄道事業に積極的に投資。モルガン財閥と競争を繰り広げた。1877年のシカゴ・ノースウエスタン鉄道への資金調達を皮切りに、1881年にはペンシルバニア鉄道、シカゴ・ミルウォーキー・セント・ポール・アンド・パシフィック鉄道への資金調達を行った。シフは、1897年にユニオン・パシフィック鉄道の事業再建の資金調達を支援した。1901年のモルガン財閥とのノーザン・パシフィック鉄道の買収攻勢防戦劇は当時の大きな話題となった。また

長期間にわたって、ウェスティングハウス、ウェスタン・ユニオン、ポラロイドなど、アメリカ合衆国の大企業と密接な関わりを持ち、長期の財政的な後ろ盾となった。またオーストリア、フィンランド、メキシコ、ベネズエラなど一部の外国政府の財政アドバイザーも務めた。パリ・リヨン・地中海鉄道の社債を引受けたこともある。国内の主要産業への投資のみならず、クーン・ローブを通じ中華民国や大日本帝国などの公債引き受け等にも参画。日本政府が日英同盟を根拠にして日露戦争の日本公債をイギリス・ロンドンで販売した際、ロスタイルド家は購入を拒否。その代わり同家は行動を共にするジェイコブ・ヘンリー・シフを紹介した。日本は戦費を調達できたが、戦後は金利を支払い続け、シフは「日露戦争で最も儲けた」。1911年にはクーン・ローブはロックフェラーと共同で、後にチエース銀行と合併するエクイタブル・トラスト社を買収した。関東大震災のときは台湾電力の社債を引受けている。

※5 1917年 第一次世界大戦のため、日本人だけのD 歩兵中隊第一ハワイ歩兵連隊が編成される。欧州戦線で活躍。

※6 1919年（大正8年）のパリ講和会議およびヴェルサイユ条約で、山東問題について、大日本帝国は対支2ヶ条要求を中華民国が受諾したと主張したが、中華民国は対支2ヶ条要求は強要されたもので、山東は自国に復帰すると主張した。イギリスとフランスは前者を支持したが、アメリカ合衆国は後

者に同情的だったため、大日本帝国は、要求が拒否されるなら国際連盟規約に調印しないと迫ったため、アメリカ合衆国が譲歩した。中華民国は、大日本帝国によるドイツ山東省権益の継承に反発し、ヴェルサイユ条約調印直前には、学生を中心にこれに反対する運動が盛んになり五・四運動となり、ヴェルサイユ条約の調印を拒否した。

※7 埴原 正直 はにほらまさなお、1876年（明治9年）8月25日 - 1934年（昭和9年）12月20日）は、日本の外交官。外務次官、駐アメリカ大使、ワシントン会議全権委員。1899年明治32年）、コロラド州などアメリカの8州に拡散する日本人移民の居住地の実態調査を行ない、その報告書を外務大臣の小村寿太郎に提出したが、不衛生で猥雑極まる日本人町のあまりの酷さに外務省は機密文書としてこれを封印している。

1922年には幣原の後任として駐アメリカ大使に就任する。  
1924年大正13年）の排日移民法案阻止のために国務長官・チャールズ・エヴァンズ・ヒューズにあてた書簡中に書かれた「深刻な結果」(grave consequences)の1句が対米恫喝であるとアメリカ国内で問題化し、法案に賛成しないとみられていた上院が一斉に賛成に動いた。その結果、埴原書簡が同法成立の一因とみなされ責任をとって帰国することとなった。